

長野県 飯田市立病院 看護師

桐生 美重子さんの「糖尿病看護」を取材してきました。

18年間、周囲の人々からエンパワーメントされてきた自分を感じています

地域で活発に活動されていますが、それらの活動を始めたきっかけを教えてください。

長野県の東北信地域で、LCDE が立ち上がり、頑張っているという情報は入っていました。飯田下伊那地域でもそろそろ…と思っていたところ、専門医から「始めますよ」と決意表明を受けました。そこで、院内糖尿病ケア委員会を立ち上げることから始めました。糖尿病ケア委員会のメンバーや地域医療連携室の協力を得て、飯田下伊那地域糖尿病療養指導士育成会を立ち上げることができました。



糖尿病看護を始めたきっかけを教えてください。

当時、糖尿病指導を担当していた師長の補佐をするところから始まりました。療養指導を始めた頃は、自分がたくさん説明することで充実感を得ていました。でも、2005年に京都で行われた吉田百合子先生の「体で覚える援助技術」の研修に参加して、自分の指導を振り返るきっかけを得ました。「眼からうろこ！」の衝撃体験でした。その後は、患者さんの話をしっかり聞くように心がけています。得意なのは「私メッセージ」を発信することです。

忘れられない患者さんはいますか？

糖尿病教室でお会いした、下肢を切断した患者さんです。「この話は早く聞きたかった。そうす

れば俺の足はあったかもしれない。足の話聞いて嬉しかった。もっと多くの人に知ってもらいたい」と言われました。この言葉がフットケアを導入する動機になりました。医師の指示に沿い、ケアが必要な患者さんに対して足の大切さや観察方法、正しい靴の履き方を指導しています。あの時の患者さんの言葉を大切に、糖尿病教室で紹介させてもらっています。

糖尿病看護を続けていくうえで難しいと感じていることはありますか。

糖尿病を管理できていた方が高齢、独居といった状況の中で、病状が悪化するケースが増えていきます。早めに周囲のサポートが得られるよう支援するのですが、なかなかうまく展開できなくて、力不足を感じています。

今後はどのような活動をしていきたいですか

後継者を多く育成したいです。LCDE 研修会を運営する中で、認定看護師を目指す看護師が現れました。大変嬉しく思います。院内でLCDEを取得した看護師もいますが、できたらCDEJも、認定看護師も目指して欲しい。糖尿病看護を目指す看護師が増えるような活動ができればと思います。その人達が、他職種と上手に連携が図れる調整役になってくれると良いですね。

周囲の方にメッセージはありますか

糖尿病看護に携わって18年。頑張ってきた私は、患者さんや医師、上司、同僚、委員会のメンバーなど周りの人からエンパワーメントされた結果なのだと強く感じています。糖尿病看護に継続して関わられたことに感謝しています。



インタビュー：広報委員 和田幹子